

初期文芸時評とフランス文学

小林秀雄におけるアランの受容について（Ⅱ）

小川 亮彦

1.

小林秀雄の初期批評活動においてアラン受容がどのような意味を持つのか、を探究するには、昭和11年(1936)刊行の、小林訳『アラン——精神と情熱とに関する八十一章』を基点にする以外に方法はない。こうした事情は、本論集前号の拙稿(『翻訳、そして、散文の論理——小林秀雄におけるアランの受容について(Ⅰ)』)⁽¹⁾で指摘したとおりである。そこでは、小林の翻訳性向の解析を中心に据えて、アラン受容が小林の〈散文〉形成に果たした役割を、昭和15年(1940)の『オリムピア』をサンプルにして考察してみた。小林とアランとの関わりを昭和11年を出発点として追跡するとき、こうした通時的作業は必然であって、とりわけ、小林の〈散文の論理〉の根底にアランの散文が横たわっている以上、やがては、小林の散文の完成とも言うべき昭和17年(1942)の『無常といふこと』などに、アラン受容の最終的な位相を確定することも必要になってくる。

しかし、以前にも述べたように、小林のアランとの出会いは、「一つの事件」であった〈ランボオ体験〉や、『ヴァリエテ』を発見する〈ヴァレリイ遭遇〉にそれほど遅れていたわけではない。昭和11年以降の、アラン受容の終結点を画定する前段階として、本稿では、昭和11年以前の、小林の初期文芸時評のなかに、アラン受容が認められるかどうかを探ってみる。これによって、アラン受容の時期の問題だけでなく、小林が同時代の日本文学を語る際に〈フランス文学〉がどのように作用しているか、の一例があきらかになるだろう。そしてまた、従来の小林研究では軽視されがちな、初期文芸時評(正確に言うなら、時評の形を借りた〈批評〉)の意味にも、新たな光が当てられるだろう。

2.

翻訳『アラン——精神と情熱とに関する八十一章』の刊行が昭和11年(1936)であり、それ以前には、小林によるまとまったアラン論は存在しないのであるから、常識的には小林のアラン受容の影響を読み取るべきは、それ以後の著作ということになろう。しかし、拙稿で先にも示したように、

「アランは大學の學生時代、好んで讀みました。(中略)辰野先生の家に行き、アランといふ人があるが、他に本があつたら貸して欲しいといふと(中略)君は毎月N. R. F. の“Propos d'Alain”を讀まないのかと言はれた。」⁽²⁾

という証言から考えると、学生時代から昭和11年に至る数年間の文学活動のなかにも、アラン摂取の影響が潜んでいる可能性もある。小林自身が自らの批評において、アランの名を記しているかどうかは問題ではない。もし「アラン」という指標を隠しているとしたら、その隠している事実自体がまた、小林の批評の性格を別様に説明することになる。

3.

昭和4年(1929)の『様々なる意匠』に続く昭和5年から8年にかけては、『アシルと龜の子』⁽³⁾に代表されるような、文芸時評の時期であるが、このなかに『ナンセンス文学(原題は『笑に就いて』)]⁽⁴⁾という批評文がある。全体が11の段落——11の断章とみなすように書かれている——でできていて、主題は次の最終断章にあきらかである。

「私は最近の『ナンセンス文学』が、過去の微苦笑文学の齎したものよりももつと明朗な笑ひを表現したいといふ、倫理的欲求であることを望む。もし、文学の裡に操り人形の笑ひをたたき込もうといふ洒落に過ぎないのなら、さういふ笑ひを表現するのに、文学などといふ表現形式は最も愚劣で貧弱な形式である事を知るべきだ。」

ナンセンス文学に対して、理念と矜持を持って、と鼓舞している文章だが、「笑ふのは人間だけだ。」で語り始められる全篇は、この最終断章を除けば、ナンセンス文学云々はほとんど皆無であって、「笑ひ」とは何か、についての言及で満ちているのである。

ここで、第4断章の冒頭を見てみると、

『「人體の態度、姿態、運動は、この人體が一つの單なるメカニックであると吾々に思はせる事に正確に比例して滑稽である」』⁽⁵⁾ (Bergson; Le Rire)

これは『笑ひ』の中の有名な文句である。(中略) ベルクソンには、滑稽といふ意識は、自然といふ生き生きとした持續體中で、弛緩した、機械化した、物質的な、停止的な一階段とみえた。

とある。つまり、この『ナンセンス文學』の一文全体が、ベルクソンの〈笑ひ〉についての概念を梃子としている事情を小林は明示しているのである。ところで、『ナンセンス文學』のなかで、散文として含蓄を感じさせる優れた部分は、第7断章、第8断章の次の部分である。

「私はここで、今迄觸れなかつた最も重要な笑ひの形式に觸れよう。それは、ベルクソンの『笑ひ』に於いては規定されてゐない微笑といふ笑ひである。もちろん私は笑ひの表情について語つてゐるのではない。笑ひの觀念について語つてゐるのである。だから子供が微笑といふものの性質を變へないで哄笑することがあつても少しも差し支へない。(中略) 母親は子供に微笑する、子供は母親に微笑する、ここに機械化はありはしない。二人はただ生きてゐると言つてゐるだけだ。(中略) 微笑するとは生きる喜びである。(中略) 笑ひの裡には常に防衛と不安とがある。(中略) 微笑する人には、何んの不安もない。(中略) 子供は大人より笑ふ事が拙劣で、微笑することが上手である。子供が美しい所以である。そして又すべての人間の美しさは子供の微笑に胚胎してゐる。」 (傍線筆者)

〈ベルクソンの『笑ひ』〉から出発してそこを離脱し、ベルクソンを超えた局面に歩を進めた小林が、小林流の「笑ひ」を描ききった文章、として、ここには提示されている。『ナンセンス文學』の中心部を構成するこの部分(殊に傍線部)が、小林のオリジナルであるならば、この批評文はベルクソン受容の單純な一形態に過ぎず、話は簡單である。しかし、真相はそうではない。

拙稿で先に扱った、『アラン——精神と情熱とに関する八十一章』の翻訳例の一部を以下にもう一度示す。

〔アラン原文〕

Le sourire est la perfection du rire. Car il y a toujours de l'inquiétude dans le rire, quoique aussitôt calmée; mais dans le sourire tout se détend, sans aucune inquiétude ni défense. On peut donc dire que l'enfant sourit mieux encore à sa mère que sa mère ne lui sourit; ainsi l'enfance est toujours la plus belle. Mais dans tout sourire il y a de l'enfance; c'est un oubli et un recommencement.⁽⁶⁾

〔小林の訳文〕

「微笑は笑いの完成だ。笑いのうちには、すぐ鎮まるとはいえ常に不安があるからだ。微笑のうちではいっさいがくつろぎ、なんの不安も抵抗もないからだ。だから、母親が子供を見て微笑するよりも、子供は母親を見てもっとじょうずに微笑するといえる。幼年時は常に美しい。逆に、どんな微笑にも幼年時がある、つまり忘却と再始がある。(第5部 第13章「笑い Du rire」)⁽⁷⁾

これで、『ナンセンス文學』の第7、第8断章がアランに拠っているのは明白であるが、もう一度、アラン原文・小林の訳文を〔A〕とし、『ナンセンス文學』の表現を〔B〕として、二者の対応を整理すると次のようになる。

- 〈第一〉〔A〕 il y a toujours de l'inquiétude dans le rire, quoique aussitôt calmée;
「笑いのうちには、すぐ鎮まるとはいえ常に不安がある」
〔B〕 笑ひの裡には常に防衛と不安とがある
- 〈第二〉〔A〕 l'enfant sourit mieux encore à sa mère que sa mère ne lui sourit;
「母親が子供を見て微笑するよりも、子供は母親を見てもっとじょうずに微笑する」
〔B〕 母親は子供に微笑する、子供は母親に微笑する(中略)子供は大人より笑ふ事が拙劣で、微笑することが上手である
- 〈第三〉〔A〕 l'enfance est toujours la plus belle. Mais dans tout sourire il y a de l'enfance; c'est un oubli et un recommencement.
「幼年時は常に美しい。逆に、どんな微笑にも幼年時がある、つまり忘却と再始がある」
〔B〕 子供が美しい所以である。そして又すべての人間の美しさは子供の微笑に胚胎してゐる

微笑を笑いの最上位概念として位置付け、笑うことのなかに存在する美德を述べていく行き方、幼児のなかに宿る穏やかな人間本性に優位性を認める視点、人間の真実を奨揚する支点として、「幼年時は常に美しい」と、真と美を同一視する態度等、アラン原文・小林の訳文〔A〕と、『ナンセンス文學』の表現〔B〕とは完全に対応しているのである。すなわち、出典まで明記されているベルクソンの引用は、単に『ナンセンス文學』本文の契機にすぎず、本文そのものは、小林によるアランの

変奏、というよりもむしろ、盗用と紙一重の、アランのテキストの、部分的ながらも直接的な再演といってよい。ベルクソンがそうであるように、アランの名は引用されていないが、読者に隠されている、ここでのアラン受容は、もちろん意識的におこなったはずである。したがって、『アラン——精神と情熱とに関する八十一章』刊行以前にも、小林のアラン撰取が進行していたことははっきりしているのである。

4.

引用に関して、引用部の明記、原著者名の記述がある場合は、作者が引用という行為に対して意識的であるのは当然である。しかし、それらが明記されていない場合は、引用行為そのものが、意識的と無意識的との混在のうちになされているだろう。そして、そうであるなら、引用行為の、意識的と無意識的との狭間の解明にまた意味があるはずである。『ナンセンス文學』におけるアランという指標の隠蔽は、なんらかの理由で意識的であったに違いないが、今、問題としている部分に関して、おそらくは小林の無意識的であったと思われる側面から考察してみたい。

一般に小林のフランス文学受容、というとき、フランス語原文の語句や一文が、小林の批評文の細部に入りこんでいる場合は無数にある。探そうと思えば、〈証拠〉はいくらでも見つかるだろう。だが、この『ナンセンス文學』では、中心概念をアランに負っていることとともに、断章形式をとっていながら、第7断章、第8断章の二つにわたって、アランが再現されているのが重要である。つまり、二つの断章中にアランの原文が解体され、設定された溝の前後にそれが再構成されているわけだが、アランの原文に解釈が付加されているとは言え、その〈再構成〉はそれほど強力なものではない。つまり、アランの〈散文の論理〉が、せっかくの断章という形式を無化している、アランの論理の様式が、『ナンセンス文學』の文脈の進め方、いわば小林の〈散文の動態〉を支配しているのである。言い換えれば、アランの一定の長さの散文における〈散文の論理〉——『精神と情熱とに関する八十一章』全体に遡ってもよい——と、小林が『ナンセンス文學』で選択した〈断章形式〉は衝突している、ということである。

小林の批評文で、断章形式をとっているものは、この『ナンセンス文學』の他には、ほぼ同時期に書かれた有名な『批評家失格Ⅰ』『批評家失格Ⅱ』⁽⁸⁾がある。『ナンセンス文學』の各断章の長さはマチマチであるのにくらべ、『批評家失格Ⅰ』『批評家失格Ⅱ』の各断章はかなり短く、また、揃えられている。批評という行為の苦さと深淵を独特のアフォリズムで表現したこの文章は、『様々なる意匠』に呼応し

た内容を含んでおり、その一部は小林秀雄研究でも頻繁に組上にのぼる。だが、しばしば、アフォリズムが、その固有の冷たさの裏に熱狂が潜み、それゆえに一種の臭みを免れないものであるように、『批評家失格Ⅰ』『批評家失格Ⅱ』にもアフォリズム特有の、散文としての脆弱さがたしかに認められるのである。そこでは小林の散文の魅力は減じていると言わねばならない。実際、この時期以降、小林の批評から断章形式はほぼ姿を消すことになる。

ところで、アランの散文において、それがどんな印象深い警句を含んでいようとも、なによりも鮮やかに表れているのは、まとまった単位としての〈散文の論理〉の澁刺とした動態である。小林秀雄の散文についても、おそらく、事は同様なのではあるまいか。

「批評とは竟に己れの夢を懐疑的に語る事ではないのか」⁽⁹⁾

がどんなに告白、宣言として優れていようとも、それは『様々なる意匠』の文脈のなかでこそ光を放つのであり、

「母親にとつて、歴史的事實とは、子供の死ではなく、寧ろ死んだ子供を意味する」⁽¹⁰⁾

という逆説が重く響くのは、『歴史と文學』の、他の文章を捨棄した果てではないのである。そうして、この事実は、小林秀雄のテキストを細分し裁断し続ける小林秀雄研究者に重大な反省を促す。いみじくも、小林秀雄は『アラン「大戦の思い出」』のなかで、

「アランとかヴァレリイとかジイドとかいふ様な人々の論文は、極めて文學的な表現であつて、それぞれ獨特なスタイルを持ち、彼等の思想には、彼等の言葉とともに生き死にすると推察される部分が非常に多く、(中略)放つておけば擴散したがる彼等の思想を、彼等の原文の枠の裡に押し戻す努力が必要なのである。(中略)思想と呼ばれてあるものとても、詩と酷似したものであり、換言も要約も不可能であり、又、不可能で一向差し支へないのである。」⁽¹¹⁾ (傍線筆者)

と、原テキストを〈注釈〉し「要約」することの危険性と、原テキストを全体の動態として捉えることの重要性を主張しているし、また、アラン自身も、『修辞学の先生』で次のように語っている。

「美は我々に考えることを促す。美しい詩句や格言を前にして、精神はこの絶大なる力を計る義務がある。注釈はけっしてもとの名句に等価にはならないということが、原文の表徴のまわりに、動物の群れのように思考を集めるべきことを示している。」⁽¹²⁾

(傍線筆者)

要するに、小林もアランもここで等しく強調しているのは、あるテキストを〈読む〉とは、その全体性を損なうことであってはならない、という自戒である。そしてこれは容易に、彼ら自身のテキストに対して、読者がどう接して欲しいか、という願望に転化していたはずである。もとより、テキスト研究とは享受にとどまるものでなく、不可避的にテキストの組織的破壊作業という過程を経るものであって、読者＝研究者が、彼ら二人に盲目的に従う必要はない。だが、小林研究者がときとして行う、テキスト横断的(inter-textuel)な理念抽出に対する警告を、小林が前もって発している事実は軽くないのである。それはつまり、小林が遺したものは、アランが遺したものと同様に、〈観念〉ではなく、〈散文〉なのだ、という簡単で重い事実をわれわれが忘れがちだからである。そしてこれはまた、アランと小林の二者を繋ぐ鍵が〈散文の論理〉であることの本質的な重大さを新たに喚起させるのである。

本稿で対象としているアラン受容の問題に限らず、小林を読むためには、小林のある作品全体を、散文の動態の連続として読解する作業が常に望まれるということは、記憶しておいてよい。

5.

先にも引いた、小林の『アラン「大戦の思い出」』という文章は、小林の限られたアラン論の系譜のなかでも比較的まとまったもので、おおい、これについては考察するが、今、その冒頭の部分を見てみたい。

「アラン『大戦の思い出』(岡倉正雄譯)を読む。

かういふ本が紹介されるのは、大變いいことだが、翻譯が成功してゐるとは思へなかつた。アランの翻譯が容易でないのは、僕にも經驗があるから、よく知つてゐる(中略)。この譯書には、吉江喬松氏が序文を書みているが、そのなかにかういふ奇妙な文がある。「本書中にある如く、從軍中彼はクロオデルの『義務とは疑ふ餘地のない量的に近接せる事柄である』といふ、言葉といふより意義だけで成立つてゐるこの難解なフレーズに釋然とする」と。

『義務とは疑ふ餘地のない量的に近接せる事柄』だといふ風に書かれても、その意味は、

恐らく誰の頭にも素直には這入って来ないだらう。『量的に近接した』といふ様な言葉からして、どうしてこんな妙な言葉を使ふか解らない。だが、この文句はクロオデルの文句で、アランが戦場の経験により、釋然とするところがあつた「言葉といふより意義だけで成立つた難解な文句である」といふ風な註釋がついてゐると、何が成る程だかはつきりしないままに、成る程といふ氣持ちがして来る。さういふ氣持ちがし始めると、文句の拙劣さとか曖昧さとかいふものは、もう何の邪魔にもならぬ。それどころか其の拙劣さ曖昧さが却つて成る程といふ感じをいよいよ確かなものとする。これは翻譯界に屢屢現れる蜃氣樓であつて、翻譯する人も、翻譯を読む人も、この惑はしから逃げる事は仲々困難である。

原文中にあるクロオデルの文句は、讀んで字の如しと言ひ度ひ程、極く當り前に書かれてみて少しも固苦しく譯す必要のないものだ。『義務といふものは、ついお隣りのことで、疑ふ餘地などない』と誰が讀んでも讀めるのである。人間は義務という一般觀念によつて動くのではない、つい鼻の先きの事件にかかづらふ、その中に義務を見るのだといふ考へ方はアランの重要な思想のひとつである。⁽¹³⁾

因みに、小林がここで言及している、アランによるクロードルの引用部の原文は以下のとおりである。

De tels exemples m'ont fait comprendre un peu ce mot que j'ai trouvé dans Claudel: "Le devoir est des choses prochaines sur lesquelles il n'y a point doute" ; tel est bien le sens, si ce n'est la lettre.⁽¹⁴⁾

ここで判断する限り、岡倉の訳文⁽¹⁵⁾と、その延長上の吉江の序文にたいする小林の弾効はまことに當を得たものである。実際のところ、この岡倉の翻譯の日本語は、労作とはいえ全般に非常にわかりにくく、岡倉が苦闘したようすは、「アラン断想」と題された岡倉自身の翻譯後記がひどく錯雑としたものである点に、如実に表れていて、とうてい小林のアラン理解の深度に太刀打ちできるものではない。とにかく、ここでは、小林は、アランの思想の理解者としての自負を持って、すなわちアランのテキストの翻譯者としての自信を抱いて、論評を加えているのだが、その自負のひとつの現前が、『ナンセンス文學』一篇である。しかし、そこでは、表層にすぎない〈ベルクソン〉が可視的指標であるのに対し、散文の肉体とも言うべき〈アラン〉は何故隠蔽されているのか。

小林のアランに関する短い文章に『アランの事』がある。これは、大学生時代にベルクソンやアランを讀んだ思い出から始まって、この二人の哲学や文体について語ったものである。独特の譬え話の裡に、二人をいろいろ対比しており、その細部

の検証は、昭和33年(1958)から始まるベルクソン論(『感想』)を参照せねばならない。『感想』において、小林はベルクソンの「科學」に足を踏み入れ、古典物理学から相対性物理学への物理学のパラダイム変換に、ベルクソンの側から立ち会うことになる。『感想』は、その長さ、結局は未完(破綻)に終わったという結果によって、『感想』を中心とする「小林とベルクソン」は、小林秀雄の後期批評活動におけるフランス文学受容の最大の問題として残されている。初期批評活動の時代を対象とする本稿は、小林秀雄におけるベルクソンの受容を扱うものではないので、この問題は置いておくが、今、『アランの事』の一部を見てみると、次のようにある。

「彼(=アラン、筆者注)は、一番立派なシステムは現實の相に一番類似したシステムだといふ信念を頑強に守つてゐます。ベルクソンは所謂現實といふものの假面を明示して現實の核心に人をつれこむが、アランはてんで現實の本質とは何かといふ様な命題を氣にかけません。寧ろ假面をそのまま受け入れよと説きます。現實が假面なしには成り立たぬ、まさしくその點を先づ諒解してかかれと解きます。ベルクソンが假面をすてるといふところを、アランは貴様の假面の被り方は下手だ、もつとうまく被れと言ひます。(中略)科學者の様な哲學者と文學者の様な哲學者の相違でありませうか。」⁽¹⁶⁾ (傍線筆者)

「假面」の一語は、小林の批評全体において、〈作家の顔〉〈詩人の貌〉などと対比するとき、ひとつのキーワードになっているのだが、今はそれを問題とするのではない。

アランとベルクソンに関しての「假面云々」の正否は別として、注目し値するのは、「假面をすてろ」(ベルクソン)の叙述の単純さと、「貴様の假面の被り方は下手だ、もつとうまく被れ」(アラン)の叙述の膨らみとの差異ではあるまいか。ベルクソンの哲学に「科學」を見出し、アランの哲学に「文學」を嗅ぎとる小林が、二人に小林一流の正しい装いをさせているわけだが、「アラン——貴様の假面の被り方は下手だ、もつとうまく被れ」の表現のほうが工夫を施したものであるのはあきらかであり、ここに関してだけ言えば、この二人の比較のうち、アランについての形容だけが、立ち上がってきている。もとより、小林にとって、この時期、「科學」より「文學」が重要なのは当然であって、二人を正確に計測しつつ、自らを仮託したのは、アランに対して、もっと言えばアランの散文に対してである。この間の事情の一端が、『ナンセンス文學』における、「明示されたベルクソン引用」の軽さと「隠されたアラン引用」の豊穡さとの差異になっているのである。

『ナンセンス文學』において、〈アラン〉が隠されている理由は、ある意味では

自明である。『ナンセンス文學』で、たとえば「アランは次のように言っている」として、アランの引用部を括弧でくくった場合、散文の中心部はほとんどすべてその括弧の中に入ってしまい、「ナンセンス文學はこうあるべきだ」というような一見主題めいた文章群が、周縁に纏わり付くだけになってしまうだろう。『ナンセンス文學』の散文が、アランの原テキストにあまりに近接しすぎているのである。そして、おそらく小林自身も明確にそれを意識していたはずである。

一見盗用と見紛がうこの引用は、一応は、原テキストの再構成であるから、小林自身が〈盗用〉とまで意識していたとは考えにくい。しかし、仮に、その原テキストを含む『精神と情熱とに関する八十一章』の翻訳が、『ナンセンス文學』に先行していたならば、〈アランの引用〉が明示されていたであろう、あるいは、『ナンセンス文學』はまったく別な批評として書かれたであろう。だが、幸か不幸か、翻訳はまだ行われていなかった。小林は『ナンセンス文學』において、〈アラン〉という海で、自身の〈散文〉を泳ぐことを選びとったのである。小林がそこで自分の日本語散文のオリジナリティをどう判断したかは謎である。しかし、はっきりしているのは、泳いだ航跡は綺麗に提出したが、水面下で手足をどう動かしたかは、きっぱり隠蔽したということである。

そして、この事実は、初期文芸時評において、隠されているのは〈アラン〉だけではないことを、印刷された雑誌の時評と小林の書齋との間には大きな距離があることを、充分推測させるのである。

6.

昭和5年から昭和8年頃の、小林のいわゆる文芸時評は、『ランボオ I』(大正15年)『「悪の華」一面』(昭和2年)、『志賀直哉』(昭和4年)などの一種激越で熱狂に満ちた〈詩的〉散文から、昭和10年代後期の、静謐に満ちた緊密な散文への移行の、過渡的な作品群とみなすこともできる。これについて中村光夫は次のように述べている。

「『様々な意匠』では、自分のなかに立籠り、傍観者のポーズをとっていたのに反して、ここ(=『アシルと龜の子』、筆者注)ではその思想を、進んで文壇の事象と噛み合わせ、それを具体的な時評の形で展開している點で、明かに一歩進んだ決意と工夫が見られます。

しかし前作では、あたりを無視した形で、哲學者的な語り口を見せた氏が、この大雑誌(=『文藝春秋』、筆者注)に連載した文藝時評では、いつも讀者を意識して、いわば

演劇的あるいは俳優的に振舞っているのも事実です。

(中略) これらの文章は『様々な意匠』が代表する獨白的な本格的評論と、『アシルと龜の子』を中心とするいわば演劇的評論と、さらにその「楽屋」を見せた『感想』類の三つに分けられます。(後略)⁽¹⁷⁾ (傍線筆者)

中村が言うところの「演劇的評論」が、昭和10年代には姿を消していくのは周知のとおりであるが、散文の結構に関しては、多くの試みが成されており、この時評のなかには、プロレタリア文学批判の過度に戦闘的な文章が顔を覗かせるかと思えば、一方で、『同人雑誌小感』の、同人誌批判にあたっての、以下のような、闊達でユーモラスな表現もあるのである。

「同人諸君の希望に副ふ様に、一體世間の誰が同人雑誌を讀むだらうか。うちのお袋はふろのたき付けには同人雑誌が一番だと主張するが私は別に一番だとは思はない、といふ文句で實はこの一文を始めようかとさへ考へた位なのである。」⁽¹⁸⁾

こうしたさまざまな〈演劇〉的散文は、やがて無事に衰退していくのであるが、それは常に、小林の〈散文〉の熟成であると同時に、いくつかの可能性の放棄でもあったろう。そういったプラスとマイナスについては、今は取り上げない。本稿で考えたいのは、これらの文芸時評のなかに、『ナンセンス文學』を投げ込んだとき、何がわかるかということである。

勿論、「ナンセンス文学批判」という主題そのものは、文学史的にも、また小林の批評史上でも、それほど重要なものではない。むしろその〈散文の様式〉が、『オリムピア』などに近似して、独特の完成度と安定を示していることに意味があるだろう。つまり、『ナンセンス文學』は、初期文芸時評のうちでも、昭和10年代の〈緊密〉な散文群に近い位置に達しており、作品毎に振動を繰り返す文芸時評の〈散文〉の収束する地点を預言しているとも言えるのである。

この間の事情は、改題される前の標題からも考えるべきだろう。『ナンセンス文學』の初出の標題『笑に就いて』は、中心の主題を如実に語っているし、ベルクソンの引用テキストの標題『Le Rire (笑い)』とアランの原テキストの標題『Du rire (笑いについて)』とに完全に呼応していて、きわめて正直である。文壇に登場したばかりの批評家という姿と、文芸時評欄という枠組みの下で、ナンセンス文学批判の時評形態の背後に、読者は無理なく、〈笑い〉〈微笑〉の本質を読み取っていくであろう。小林の軍略はこうして完成していく。

だが、われわれはもう一度問わねばならない、時評家小林秀雄が見つめていたの

は、同時代の日本文学であったのかどうか、と。包丁の下に身を晒しているのはたしかに「ナンセンス文学」である。しかし、料理人の眼差しはそこには注がれていない。批評文『ナンセンス文学』が対象としているのは、笑いについてのベルクソンの〈観念〉であり、微笑についてのアランの〈散文〉でしかない。つまり、極言するなら、『ナンセンス文学』においては、批評対象としての日本文学は背景に退き、小林の思念は、フランス文学のテキスト上を行き交っているのである。『ナンセンス文学』が、たとえばプロレタリア文学批判の文章などの苛立ちからほど遠く、安定した散文に成り得ているのは、批評対象としてのフランス文学テキスト——読者には隠されている——に対する小林の信頼感に起因する。

勿論、先にも述べたように、初期文芸時評には多様な局面が認められるのであって、『ナンセンス文学』をその代表と断じることはできない。しかし、『ナンセンス文学』に見られる、小林の、同時代日本文学とフランス文学とに対する姿勢の差異が、やがては、日本回帰、古典発見として結実してゆく『無常といふこと』などの達成を準備していることはあきらかである。なぜなら、これは別稿で論じる予定であるが、昭和10年代後期の日本古典に関する批評は、小林のフランス文学受容の真正な到着点でもあるからである。

小林は昭和25年（1950）の第一次全集収録時に、標題『笑に就いて』を『ナンセンス文学』と改題した。自身の著作群を整理するにあたって、あくまで、この批評文を、〈時評〉作品として明確に位置付けたかったのは事実だろう。しかし、アランの原テキスト『Du rire（笑いについて）』を含む『精神と情熱とに関する八十一章』を翻訳刊行した後の小林にとって、『笑に就いて』という標題の保存は、気恥ずかしかったに違いない。その標題は、自身の〈時評〉という工房のからくりを読者に容易に想起させ得るのだから。あるいは、次のように言っても許されるだろう、この標題の変更は、批評文『笑に就いて』全篇を消し去る代償行為ではなかったか、と。

だが、『ナンセンス文学』において、小林が、何をどのように隠蔽しているかは、もはや重要な問題ではない。小林がどのような化粧を施そうが、『ナンセンス文学』の構造が予測させる、同時代の日本文学に直接の批評対象を見出せなくなるという事態は、そのまま、昭和10年代以降の、〈時評〉からの離脱に繋がっていく。それは、幸福でも不幸でもない、小林自身が選びとった悲喜劇なのである。

註

- (1) 拙稿『翻訳,そして,散文の論理——小林秀雄におけるアランの受容について(Ⅰ)』——「文学研究論集」第10号 筑波大学比較・理論文学会 1993 pp.29-52.
- (2) 小林秀雄『アランの事』——「小林秀雄全集第3巻 私小説論」新潮社 1978 p.253.
(初出は「文學界」1934 2月号)
- (3) 小林秀雄『アシルと龜の子』——「小林秀雄全集第1巻 様々な意匠」新潮社 1978 pp.28-72.(初出は「文藝春秋」1930 5月号~1930 8月号)
なお,小林は1930(昭和5)から1933(昭和8)にわたって,「文藝春秋」「改造」「新潮」「中央公論」等で,文芸時評欄を担当している。
- (4) 小林秀雄『ナンセンス文學』——前掲註(3)と同書 pp.157-161.以下,本稿における引用は,すべてここによる。(初出は「近代生活」1930 4月号,原題は『笑に就いて』で,1950(昭和25)の「第一次小林秀雄全集第4巻」創元社 収録時に,改題されている。)
- (5) 小林が『ナンセンス文學』で引用しているベルクソンの原テキストは以下である。
Bergson, Henri. *'le rire; Essai sur la signification du comique'* Oeuvres complètes d'Henri Bergson. Genève: Edition Albert Skira, 1945. p.30. *"Les attitudes, gestes et mouvements du corps humain sont risibles dans l'exacte mesure où ce corps nous fait penser à une simple mécanique."*
(このテキストの初出は,「パリ評論 *Revue de Paris*」1899. 2月1日号, 2月15日号, 3月1日号である。なお,小林が参照したのは,「序 Préface」が付いた第23版 1924と思われる。)
- (6) 初出は,Alain. *'81 chapitres sur l'esprit et les passions'* Paris: Gallimard, 1917.で,小林秀雄が翻訳の底本に使ったのは,1921年の再版である。なお,本稿で筆者が底本として用いたのは,以下である。
Alain. *'81 chapitres sur l'esprit et les passions'* *Les Passions et la Sagesse*. Bibliothèque de la Pléiade. Paris: Gallimard, 1960. p.1218
- (7) 小林秀雄訳,アラン「精神と情熱とに関する八十一章」東京創元社 1978 pp.193-194.(初出は同書 創元社 1936)なおこの部分の引用では,1978年版に従って新仮名遣いで示してある。
- (8) 小林秀雄『批評家失格Ⅰ』——前掲註(3)と同書 pp.166-175.(初出は「新潮」1930 11月号 原題は『批評家失格』)
小林秀雄『批評家失格Ⅱ』——前掲註(3)と同書 pp.176-183.(初出は「改造」1931 2月号 原題は『批評家失格』)
- (9) 小林秀雄『様々な意匠』——前掲註(3)と同書 p.13.(初出は「改造」1929 4月号)
- (10) 小林秀雄『歴史と文學』——「小林秀雄全集第7巻 歴史と文學」p.200.(初出は「改

造」1941 3月号～4月号)

- (11) 小林秀雄『アラン「大戦の思い出」』——前掲註(10)と同書 p.105。(初出は「改造」1940 1月号 原題は『感想』)

- (12) この部分は拙訳である。なおアランの原テキストは以下。

Alain. 'Le Maître de Rhétorique' *Propos I*. Bibliothèque de la Pléiade. Paris: Gallimard, 1956. p.374.

"Le beau nous somme de penser. Devant un beau vers ou devant une belle maxime l'esprit est tenu de rendre compte de cet immense pouvoir; et, puisque le commentaire n'égale jamais le trait, c'est la preuve qu'il faut revenir et rassembler ses pensées, comme des troupes, autour du signe."

(初出は1922 3月11日)

- (13) 前掲註(11)と同書 pp.99-100.

これは、岡倉正雄訳・アラン『大戦の思い出』鱒書房 1939に対する書評の形を借りての、小林のアラン論である。

- (14) Alain. 'Souvenir de guerre' *Les Passions et la Sagesse*. 前掲註(6)と同書 p.452。(初出は'Souvenir de guerre' Hartmann. Paris: 1937)

- (15) 岡倉正雄訳、アラン『大戦の思い出』 鱒書房、1939

なお、岡倉正雄訳で小林が問題としている部分は、〈序〉 p.3.と本文p.49.である。

- (16) 前掲註(2)と同書 p.256.

- (17) 中村光夫『解説』——「小林秀雄全集第1巻」前掲註(3)と同書 p.339 p.342.

- (18) 小林秀雄『同人雑誌小感』——前掲註(3)と同書 p.216。(初出は「東京朝日新聞」1932 7月13日号～15日号)